

研究代表者

所属：立命館大学経営学部

氏名：浅田孝幸

I 研究課題

「グローバル管理会計規準の可能性と展望に関する研究」

II 研究の意義・目的

近年、経済のグローバル化に伴い企業活動も多様化しており、企業が直面する状況により、実務においても様々な管理会計システムが利用されている。管理会計の研究者は、個別事例を調査し、その結果を蓄積するという形で研究を進めている。このような研究の方向性は、実務を紹介し、実務を個別的に洗練化することに有用と思えるが、研究成果を統合し理論化を試みることは難しいように思える。

今後の管理会計研究の方向性として、現在のようなグローバル化・多様化した実務で用いられている管理会計システムを検討していく際に、これらの実務を統合するようなフレームワークを構築していくことが必要となる。CIMA(Chartered Institute of Management Accountants)が提唱するGMAP(Global Management Accounting Principles)は、CIMAが長年にわたる実務的な経験から得られた知識に基づく管理会計における指針であり、私たちが求めている研究アプローチにおいて1つの手がかりになると考えられる。また、今回の研究プロジェクトにおいて、事例調査の成果に基づきGMAPの洗練化を図り、その成果を実務へと提案することができれば、実務に対しても大きな貢献をすることができる。

本プロジェクトの目的は、グローバル化・多様化の時代における実務の管理会計基準の有用性を検討することである。その際、実務で用いられている管理会計システムを調査し、その応用可能性を検証することにより、GMAPの洗練化を図り、これを実務界ならびに学会へと提案していきたい。また、このような時代における管理会計研究の分析フレームワークとしてもGMAPは大きな足がかりとして研究していきたい。

III 研究計画

本研究プロジェクトは以下の4つのステップからなる。

- ・ ステップ1：GMAP(Global Management Accounting Principles)の日本語訳を完成
- ・ ステップ2：GMAPを参考にしながら、企業調査の方法の雛形を作成する
- ・ ステップ3：企業調査を行う
- ・ ステップ4：調査結果を検討・分析する

ステップ1では、現在、50%ほど完成している GMAP の翻訳を 10 月末日までにドラフト版として完成し、これを学会会員や実務家に配布し、フィードバックを得て洗練化を図る。最終版については、12 月末日の完成を目指す。また、企業調査による事例が揃えば、CIMA による“Essential Tools for Management Accountants”の日本語版に独自の事例を追加していく。

本研究プロジェクトで企業調査を行う場合、ある程度統一された調査フォーマットを用いていきたい。そこで、ステップ2では、国内企業向け、海外企業向け、中小企業向け等のバリエーションを想定しながら、調査方法の雛形を作成する。

ステップ3では、実際に企業の調査を行う。本プロジェクトの構成員は研究者と実務家であり、調査グループについても、研究者と実務家が相互に意見交換ができるような形で調査グループを編成していく。なお、調査については予算の制約も考えられるため、可能であれば、本学会以外からの研究資金の獲得も目指す。

ステップ4では、GMAP が、どの範囲（規模、業種など）で、どの程度まで適用可能か否かという観点から検討する。さらに、新規性、グローバルな観点、学際性、グローバル比較可能性といった観点にも着目し整理・分析していきたい。ここで得られた分析結果は、ステップ1やステップ2へと反映させていく。

IV 本研究の特徴

現在、経済活動が様々なレベルでグローバル化することにより、企業活動が多様化している。このような状況は、これまで私たちが経験したことのないレベルのものであり、管理会計の研究においても、多様化（複雑化、学際化）した管理会計実務を統合する理論・考え方の必要性が求められている。本研究プロジェクトはこのような求めに呼応するものであり、管理会計研究者が実務家と協力しながら、管理会計の研究フレームワークを求めていこうとする実験的なプロジェクトであるという点に特徴がある。また、私たちの研究成果に基づき実務に対しても管理会計に関する指針を提案していくという点にもその特徴がある。

V 研究組織（氏名と所属） 50音順、敬称略

青木雅明（東北大学）、澤邊紀生（京都大学）、清水孝（早稲田大学）、松田康弘（東北大学）、間普崇（関東学園大学）。